

祭神

(東御前) 足仲彦尊——(仲哀天皇)

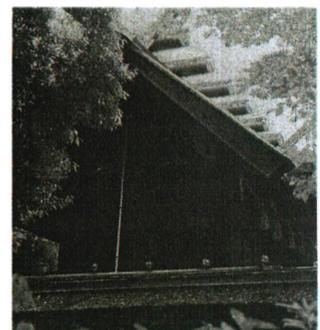
タランナカツヒコノミコト

(中御前) 誉田別尊——(応神天皇)

ホシダワケノミコト

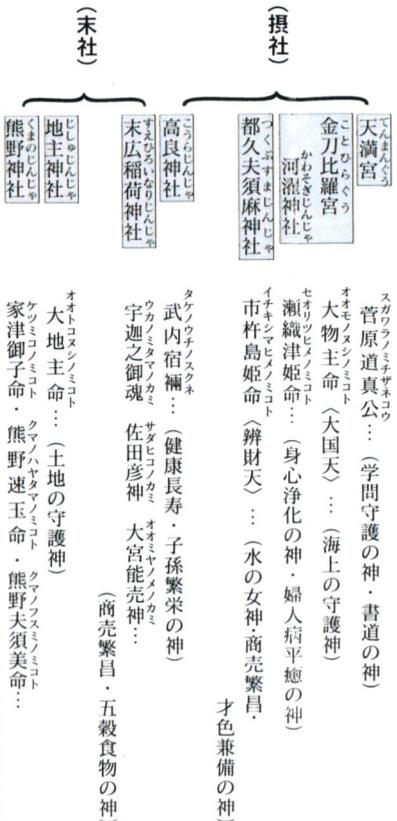
(西御前) 息長足姫尊——(神功皇后)

オキナカタランシメノミコト



○厄除開運・健康長寿の神

○安産守護の神



由緒

当宮は延久元年(一、〇六九)、源義家公が後三条天皇の勅願を受け、京都の石清水八幡宮より御分霊を迎えて鎮座された。それよりこの地は八幡の庄と称えられ庄内十一郷の産土の神として深く崇敬される事となる。当時のその社頭は三千石、一山七十三坊と伝えられ、本宮の石清水八幡宮を凌ぐくらいであったという。しかし、その後、しばしば兵火にみまわれ、その社殿は殆んど焼失された。時は流れ、天正二年(一、五七四)、羽柴秀吉公が長浜城主となるや、その大社の荒廃を惜しみ、社殿の修理造営をなし、再興に努めた。この史実は、長浜曳山祭の起源ともいえる。

社殿

檜皮葺き、木造、千木・檜木をその頂に備え八幡宮としては非常にめずらしい神明造の御本殿となつている。一説によれば伊勢の神宮の御饌殿を譲り受けたとも言い伝えられている。

曳山祭

四百有余年の伝統を誇る日本三大山車祭の一つでもある長浜曳山祭は長浜城主である豊臣秀吉公に男子が誕生し、その喜びを城下の町民に頒つべく若干兩の砂金をふるまい、これを受けた敬神の念の深き町民たちは、これを基金として、当宮の十二両の曳山を造り、町内を曳きまわつたのが起りである。そして、次第に各山組の間で其の善美を競うようになり、当時、生糸・縮緬等地場産業の盛んだつた長浜は、各地の名工を迎え、改造に改良を加え、今日の壮麗なる曳山の完成を見るに至つた。



縁の松

黒松と赤松が互いを支え合うように成長した神木。この二つの松の間をくぐり祈願することにより、男女の縁はもとより、友人関係など良き方向へと発展し、又、家庭円満等のご利益をいただける。



ご神水

千古より、境内を巡りて、生命の源として放生池(市指定文化財)に流れ込む当宮の御神水は非常に靈驗あらたかであり、早朝より汲みにこられる方は後をたたず、お茶や御飯炊きに用いられ、健康に過ごされ、又、病気の方は、飲用されることにより、その思いを快方にむかわせるとも言われる。そのうえ生への活力をふるいたたせ、悩みや心配事など精神的な傷みをも取り去る清らかなで神秘的な御神水である。